

日本国際経済学会第75回大会(日本大学)

# リカード新解釈と生産・貿易の ネットワーク理論

塩沢由典

# 要旨・フルペーパー

## 改題するなら

## リカード国際価値論の現代的意義と可能性

1. はじめに
2. リカード新解釈
3. リカード貿易理論とはなにか
4. 新しい国際価値論の概要
5. 新しい国際価値論の優位点 I (賃金率決定と原価比較原理)
6. 新しい国際価値論の優位点 II (投入財貿易)  
付録 Eaton and Kortum (2002)は、リカード・モデルか
7. 投入財貿易理論はなぜ難しかったのか
8. 国際付加価値貿易と世界最適調達
9. 失業をふくむ国際貿易理論
10. リカード国際価値論と一般均衡理論
11. 生産技術の体系の変化と運動
12. まとめ

# 概要

---

## 1. 貿易論における「新しい国際価値論」

- 投入財貿易を含む一般理論
- **Global value chains**の形成原理

## 2. 国際価値論と一般均衡理論

- 一般均衡理論の問題点
- コーナ一解とInframarginal analysis

## 3. 国際価値論と線型計画

- 環境問題との関連

# 1.1 国際貿易論の4世代

---

- 第1世代 リカード理論 比較優位説 1817
  - 第2世代 HOS理論 要素比率理論 1933
  - 第3世代 新貿易理論 産業内貿易 1979
  - 第4世代 新々貿易理論 異質企業 2003
- 
- コップ半分の水
    - まだ半分もある。 ■ もう半分しかない。

# 1.2 新しい国際価値論

- 国際価値論(theory of international values)
  - Marshallなど、日本における国際価値論論争
- 「新しい」の意味
  - Marshall流でない、マルクス系でない、ネオ・リカードィアンでもない。
  - 古典派価値論の現代的再構成(現代古典派)
    - ◆ スラッファ+オクスフォード調査
    - ◆ 上乗せ価格、上乗せ率、利潤率とは異なる。
  - Cf. Shiozawa (2016; 2017a)

# 1.3 前提と基本定理

- M国N財 (M,Nは自由、つうじょう $M < N$ )
- 投入財貿易を許す
- 各国の各企業は複数の生産技術をもつ。
- **基本定理**

以下を満たす正ベクトル $v = (w, p)$ が存在する:

$$(1) s A = d \quad (2) s J \leq q$$

$$(3) J w \geq A p \quad (3) \langle q, w \rangle = \langle d, p \rangle.$$

もし $d$ が生産可能フロンティアのファセット内部にあれば、 $v$ は定数倍を除いてユニーク。

# 1.4 正則な国際価値(最新成果)

- 定義 全域木  $T$  に対応して一義的に定まる正で認容な国際価値  $v = (w, p)$  を  $T$  が定義する国際価値という。
- 全域木
  - グラフ理論の初歩
  - 純粋労働投入経済(R0)で考えると分かりやすい。
- 正則な国際価値
  - 生産可能フロンティアに依存して決まるものではない。
  - ケインズ理論への応用

# 1.5 投入構造の諸分析

---

- アウト・ソーシング、オフショアリング
- フラグメンテーション
- 垂直貿易
- グローバル・サプライ・チェーン
- グローバル・ヴァリュー・チェーン
- 世界最適調達
- 加工貿易(貿易立国、産業革命)

# 1.6 ネットワークの構造特性

---

## ●フラクタル的

- ある財の生産には、別の財が投入される。
- どこまで遡っても、それに投入される財がある。

## ●循環構造

- A財から生産されたD財がA財生産に投入される。

## ●結論

- 生産は単線的ではない(オーストリア的生産観の破綻)。
- 多層構造・垂直構造では不十分。

# 1.7 従来の貿易理論

---

## ● 完成財の貿易理論

- リカード、HOS、HOV
- 新貿易理論、新々貿易理論

## ● 投入財貿易I(特化パターンを特定)

- Jones & Kierzkowski など

## ● 投入財貿易II(特化パターンを特定せず)

- Eaton&Kortum(2002) 多数国多数財のRモデル
- 原価に占める労働比率が一定

# 1.8 投入財貿易を扱う一般理論

- (1-1)に列挙した諸理論はすべて失格
- 新しい国際価値論は投入財貿易を扱う唯一の一般理論
  - 各国・各企業ごとにことなる所与の生産技術
  - 特化パターンと国際価値( $w, p$ )を同時決定
  - 商品による商品の生産
  - 本源的生産要素は各国の労働のみ
  - 資本(部品・原材料・機械設備)は自由に貿易

## 2.1 一般均衡理論では？

### ● Arrow & Debreu (1954)

- ほんものの一般均衡理論、数学的には完璧
  - ◆ DSGE: 一財モデルの一般均衡理論とは大違い
- 具体的分析⇒微分可能な生産関数・効用関数

### ● 一般均衡理論と貿易理論

- 貿易特化は、コーナ一解
- 一般均衡理論は、コーナ一解の分析に不敵
- 一般均衡理論以外に貿易理論がとくに必要された理由

## 2.2 一般均衡理論の問題点

---

### ●リーマン・ショック以降

- New Economic Thinking
- Real-World Economics
- Rethinking Economics (大学院生たちのNW)

### ●資本は本源的生産要素か

- 単線的理論構造
- 生産要素→中間財(1次→2次→…)→完成財
- GSCに見られる循環構造は分析できない。

## 2.3 Inframarginal analysis

---

- Xiaokai Yang, et al. (2005) An Inframarginal Approach to Trade Theory
- 場合分けに終始。
- 国際価値論: なぜ成功したか?
  - コーナ一解の骨格を構造として取り出している。

# 3.1 国際産業連関表との関係

## ●取引・輸送費用の入った国際価値論

- 商品や財・サービス番号ばかりでなく、所在国で区別する。
- 国際産業連関表と相性がよい。

## ●国際産業連関表の基礎理論

- 投入係数はいかなる意味で固定的か。
- 係数の固定性なしに、TiVA(後方連関)などを計算することには意義がない。
- VAiT(前方連関)などの正当性を問われる。

## 3.2 DuchinのWorld Trade Model

---

- Duchin (2005) A World Trade Model Based on Comparative Advantage, Economic Systems Research 17(2): 141-162.
- Graham (1949)に対するWhitin(1953)以来の誤解
  - 経済全体は、線型計画体系ではない。
  - 個別主体の「計画」を経済全体に読み替える誤り (Keynes:)
  - IIO表を用いて資源問題・環境問題を扱うのはよい。しかし、それを利用する前の理論が必要。

## 4. 今後の課題

---

- 各国間の賃金率格差の動向分析
- 技術進歩と経済成長
- 貿易自由化と(非自発的)失業
- 貿易と経済発展
- 競争力優位をどう定義するか
- 国際貿易統計の再設計(Escaith 2015)
- 為替レートとの接合

# References(論文に載らないもの)

---

- Arrow, K. & G. Debreu (1954) Existence of an Equilibrium for a Competitive Economy. *Econometrica* **22**(3): 265-290.
- Shiozawa, Y. (2016) The revival of classical theory of values, chap.8, Yokokawa et al. (eds.) *The Rejuvenation of Political Economy*, New York, Routledge.
- Whitin, TM (1953) Classical Theory, Graham's Theory, and Linear Programming in International Trade. *Quarterly Journal of Economics* **67**(4): 520-544.